

41349

教科書文庫

4
810
31-1914
20000
18174

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

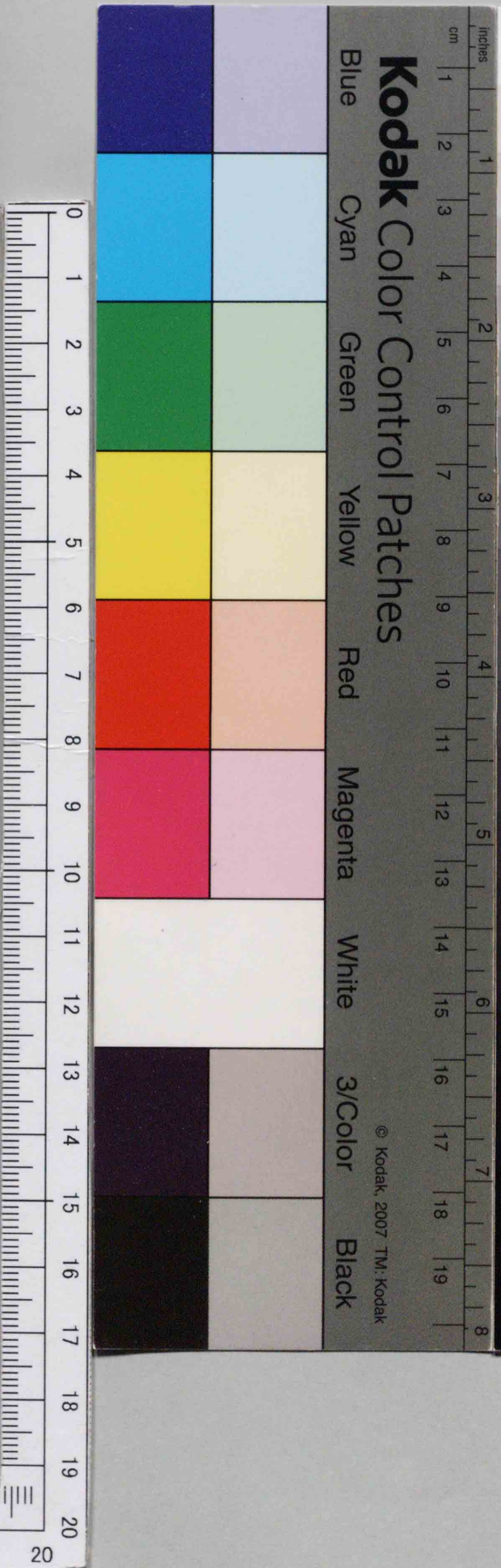


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫

4

810

31-1914

2000018174

尋常小學讀本 卷十一

文部省



資料室

375.9
Mo14

教科書文庫

4

810

31-1914

2000018174



尋常小學讀本卷十一

文部省

広島大学図書

2000018174



目録

第一課	吉野山	一	第十五課	招待状	六十一
第二課	蜜蜂	五	第十六課	料理	六十四
第三課	分業	九	第十七課	時間	六十七
第四課	兒島高德	十三	第十八課	畫工の苦心	七十一
第五課	瀬戸内海	十七	第十九課	瀑布	七十五
第六課	我は海の子	二十	第二十課	鵜飼	七十八
第七課	車と船	二十四	第二十一課	紡績	八十三
第八課	我が海軍	二十九	第二十二課	蟲の農工業	八十七
第九課	臺灣より權	三十五	第二十三課	物の價	九十
第十課	熊王丸	四十一	第二十四課	樺太より臺灣へ	九十五
第十一課	アラビヤ馬	四十六	第二十五課	諸葛孔明	百二
第十二課	笑	五十一	第二十六課	朝鮮の風俗	百六
第十三課	少年鼓手	五十四	第二十七課	平和なる村	百十一
第十四課	出征兵士	五十九	第二十八課	同胞すべて六千萬	百十五



吉野山大学
圖書印

尋常小學讀本卷十一

第一課 吉野山

吉野山霞の奥は知らねども、

見ゆる限りは櫻なりけり。

全山花の雲に包まれたる吉野山の光景まのあたり見
るが如し。

六田の渡を渡りて上り行く坂路の左右すでに櫻多し。
行くく吉野宮に參拜し、村上義光よしてゐの墓をとぶらふ。眺
望いよく開けて、満目總べて花なり。

満

奥

大まをくくとばの里花此吉野山。

といひし古人の句我をあざむかず。こゝを口の千本といふ。



吉野の町に入れば藏王堂あり。堂前四本の櫻ある處は大塔宮の吉野を落ちさせ給ふ時、別離の宴を張りて舞をまはしめ給ひし所なりと傳ふ。藏王堂の東なる吉水神社は後醍醐天皇の行宮の跡なり。當時の御製に、

花よねてよしや吉野のよし水此

まくらのもとよ石走る音。

吉水神社を出づれば、谷をへだてて向ふの山腹に如意輪寺あり。正平の昔、楠木正行が決死の士百四十三名の名字を壁に書連ね、

のへらじとのねて思へばあづさ弓

なき數に在る名をぞとむる。

といふ一首の和歌を書殘せるは此の所なり。寺の上の小高き所に後醍醐天皇の陵あり。天皇のこゝに行幸ありしより三年、北方の天を望みて崩御ありし

御心事を察し奉れば、涙わき出でて、禁じ難し。陵に至る路のあたり、櫻樹多し。之を中の千本といふ。本道を更に南へ進めば、庭園を以て名高き竹林院あり。尚進めば、水分神社みくまり、金峰神社きんぶ等あり。此の附近にも亦櫻樹多し。之を奥の千本といふ。吉野山は口中奥の千本の外、到る處櫻樹あらざるなし。花は麓ふもとより咲初めて次第に山上に及び、麓の花、中の花の盛り過ぎて、奥の花の盛りとなるまでは、ほとんど一月にわたるといふ。吉野には古く離宮あり、應神天皇おうじんの頃より奈良朝の頃

には度々行幸ありしが、山城へ遷都ありし後は、其の事絶えたり。其の後吉野の朝の皇居となりしは人の能く知る所なり。古人の句に、

歌書よりも軍書にかなし吉野山。

第二課 蜜蜂みつばち

蜜蜂は群を爲して共同の生活を営み、一群の總數數萬に及ぶものあり。群中には必ず雌蜂、雄蜂、働蜂の三種あり。雌蜂は女王ともいひ、唯一匹にして、雄蜂は二三百匹、餘は皆働蜂なり。

終日労働して、一群の生計を維持するものは働蜂なり。



少き季節に入りても、食物に不足することなきは、一に
 其の勞役の結果なり。
 働蜂中には蜂の集め來る蜜を檢查する檢查掛あり。又
 之を受取りて貯ふる貯蓄掛あり。怠りて持歸らざるも

のあれば、檢查掛は内に入るを許さず、強ひて入らんと
 すれば立ちどころにさし殺す。雄蜂は唯働蜂の集め來
 りたる物を食して生活するものにして、何等の勞働を
 もなさざるを以て、秋の初には皆働蜂にさし殺さる。
 女王の任務は卵を産むにあり。氣候の暖なる間絶えず
 之を産出するを以て、一群の數は次第に増加す。其の數
 餘りに多くなる時は、女王は新しく生れたる雌蜂に其
 の位をゆづり、臣下をひきゐて分離す。此の時箱樽^た等を
 適當なる所に置けば、分離したる一群は直ちに其の中
 に入る。故に飼養者の注意によりては、次第に其の群の

數を増加することを得べし。

同群中の蜂は極めて親密に生活すれども、他群の蜂は甚だしく之を敵視し、他群の蜂、我が群中に入り來れば、直ちに之をさし殺す。されば氣候不順にして、花のとほしき時は蜂合戦の起ること珍しからず。働蜂の武器は體の後方にある銳利なる針にして、攻撃にも防禦にも常に之を用ふ。

蜜蜂の群集生活を營むを得るは、共同團結して勞働をいとはず、有力なる武器を備へて敵軍にあたり、團體の爲には身命ををしまざるによる。

第三課 分業

一箱ノマツチヲ造ル手數モナカク、複雑ナモノデ、ソレヲ大勢ノ人が手分シテスルノデアアル。材木ヲ機械ニカケテ軸木ヲコシラヘル者、軸木ヲ火ニ乾カス者、乾イタ軸木ノ先へ藥品ヲ附ケル者、ソレヲ温室デ乾カス者、揃へテ箱ニ入レル者、十二箱ヅツ集メテ紙ニ包ム者、皆ソレレニチガフ。此ノ様ニ大勢ノ人が手分ヲシテ、別ノ仕事ヲスルコトヲ分業トイフ。

同ジ人數デ同ジ時間ニ物ヲ製造スルノニ、全體ノ人が同ジ仕事ヲスルヨリモ、分業デスル方が品物ノ出來バ

依

能

隨

エガ良クテ、製造高モハルカニ多イ。手數ノカ、ツタマ
 ツチノ價ノ安イノモ、分業法ニ依ツテ製造スルカラデ
 アル。若シ一人ノ手デ製造スルナラバ、一包三錢ヤ三錢
 五厘ニ賣ツテハ、トテモ引合フモノデナイ。
 人ハ其ノ身體才能ナドニヨツテ、仕事ニ適不適ガアル。
 分業法ニ依ルト、人々が其ノ最モ適シタ仕事ヲスルコ
 トニナル。又毎日同ジ仕事ヲクリカヘスカラ、誰モ早ク
 其ノ仕事ニ熟練スル。隨ツテ良イ品物が出來テ、製造高
 モ多クナル。
 分業法ニ依ラズ、一人デ種々ノ仕事ヲスルコトニナル

移

徒

致

ト、仕事ノ移リ變ル度毎ニ、居ル場所ヲ變へ、又器具ヲ取
 換へナケレバナライノデ、ムダニ時間ヲ費スコトガ
 多イ。分業法ニ依ツテ、一人デ一種ノ仕事ニバカリカ、
 ルコトニナルト、ソナ手數ガ省ケテ、徒ニ時間ヲ費ス
 コトガナイ。
 又分業ニ依ツテ一ツノ仕事ニバカリ掛ツテ居ルト、自
 然ソレニ精神ヲコラスコトニナルカラ、其ノ仕事ニ適
 スル器具ノ改良ヤ發明ヲスルコトモアル。
 此ノ様ニ分業ハ大キナ利益ノアルモノデアアルガ、コ、
 ニ注意シナケレバナライノハ共同一致トイフコト

テアル。分業デスル仕事ハ皆全體ノ一部分デアルカラ、ソレド、ノ仕事ヲスルモノニ、共同一致ノ考ガナケレバ、分業ノ目的ハ達セラレナイ。例ヘバ時計ヲ造ルノニ、其ノ各部分ヲ造ル人々ガメイ、ノ勝手ナ形ヲ造ツタナラ、ソレヲ完全ナ時計ニ組立テルコトハ出来ナイ。セツカク苦勞シテモ、其ノ仕事ハ何ニモナラナイ。文明ノ進歩スルニ隨ヒ、分業ハ益發達シテ、今日デハド、ンナ品物ヲ製造スルニモ、分業法ニ依ラナイコトハホトンドナイ。又國家全體カライヘバ、農夫ノ田畑ヲ耕シ、大工ノ家屋ヲ作り、商人ノ物品ヲ賣買シ、官公吏ノ事務

ヲ取扱ヒ、教師ノ生徒ヲ教育スル等ハ皆分業ニ外ナラヌノデアアル。

第四課 兒島高德こじまたかのり

元弘二年三月、北條高時ほうちう、後醍醐天皇ごたいごを隱岐おきへ流し奉る。臣下として一天萬乗の君を遠國へ遷し奉ること無道の極みなり。武家の運命も今に盡きなんと、罵りいきどほる聲ちまたに滿つ。御供仕うまつれる警固の武士もよろひの袖をしぼらざるはなかりき。

此の頃備前の國に兒島高德といふ武士あり、主上尚笠かさ置ぎにおはしませし時、早くも義兵を舉げしが、事の未だ

仁

成らざるに先だち、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、
 其のまゝにて止みたり。然るに今、主上隱岐に遷され給
 ふと聞き、一族共を集めていへるやう、志士仁人は生を
 求めて仁を害することなし。身を殺して仁を成すこと
 あり。とかや。義を見てせざるは勇無きなり。いでや臨幸
 の路次に參り會ひ、君をうばひ奉りて義軍を起し、たと
 ひかばねを戰場にさらすとも、名を子孫に傳ふべし。と
 いへば、心ある者どもいづれも此の議に同ず。さらばと
 て備前と播磨との境なる舟坂山にかくれ、今かくと
 待ち奉れり。

陰

臨幸餘りにおそかりしかば、人をしてうかゞはしむる
 に、警固の武士、播磨の今宿といふ所より山陰道へかゝ
 りて遷幸をなし奉るといふ。さらば美作の杉坂に待ち
 奉らんとて、道も無き山の雲をしのぎて杉坂に着きた
 りしに、主上はや院庄おんのしやうに入らせ給ひぬと申す。衆皆力を
 失ひて散りぐゝに成れり。

幹

高德せめても此の所存を上聞に達せばやとて、行在所
 の御庭にしのび入り、大いなる櫻の木つばきの幹をけづりて、
 大文字に詩の句を書きつけたり。
 天勾踐てんこうせんを空しうするなかれ。

時はんれい范蠡無きにしもあらず。

翌朝警固の武士ども之を見つけて、何事を如何なる者の書きたるか、読みかねて上聞に達したり。主上は詩の心を御さとりありて、天顔殊に麗しく笑ませ給ひぬ。されど武士どもは其の意味を知らざりしかば、思ひとがむることもなかりき。

是は昔、支那しなに呉越といふ二國ありて、たがひに争ひしが、呉の勢盛になりて、會稽山くわいけいの戦に越の軍を打破りたり。此のうらみ忘れ難く、越王勾踐こうせんつぶさに辛苦をなめて報復を圖り、范蠡といふ無二の忠臣の助を得て、遂に

笑 越 復 圖

雪 勤

呉を滅して會稽の恥を雪ぐことを得たり。此の故事を引きて、やがて忠臣の起りて勤王の兵を擧げ、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞え上げたるなり。

第五課 瀬戸内海

本土の西、近く九州と相接せんとする所、下關海峡あり。四國の西には佐田岬さだのさき長く突出で、九州にせまりて豊豫ほうよ海峡をなす。淡路島あはぢの北方、本土と相望む所、明石海峡あかしとなり、四國に近き所、鳴門海峡なるととなる。此の四海峡に包まれたる細長き内海を瀬戸内海といふ。

瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり、大小無數の島々

灣

峡州

むきあり。

瀬戸内海の沿岸には高松多度津高濱尾道宇品等の港
多く汽船絶えず通航して、遠く近く黒煙の青空にたな
びくを見る。

内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。嚴島は古
より日本三景の一に數へられて殊に名高く、屋島壇浦
は源平の昔語に人の感興を動かすこと甚だ切なり。我
が國に遊べる西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、
世界海上の一大公園なりといへり。

第六課 我は海の子

(一)

我は海の子、白浪は

さわぐいそべの松原に、

煙となびくとまやこそ、

我のふつかしき住家ふれ。

(二)

生れてしほに浴して、

浪を子守の歌と聞き、

千里寄せくる海の氣を

吸ひてわらべとふりにけり。

(三)

高く鼻つくいその香に、

不斷の花のかをりあり。

ふぎさの松に吹く風を

いみじき樂と我は聞く。

(四)

丈餘のろかい操りて、

行手定めぬ浪まくら、

百尋千尋海の底、

遊びふれとる庭廣し。

(五)

幾年こゝにき多へとる

鐵より堅きひふあり。

吹く塩風に黒みたる

はだは赤銅さながらに。

(六)

浪にたゞよふ冰山も、

來らば來れ、恐れんや。

海まき上ぐるたつまきも、

起らば起れ、驚かじ。

(七)

いで大船を乗出して、

我は拾はん、海の富。

いで、軍艦に乗組みて、

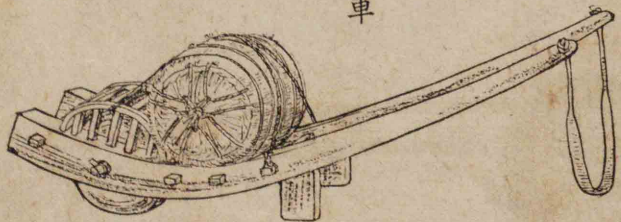
我は護らん、海の國。

第七課 車と船

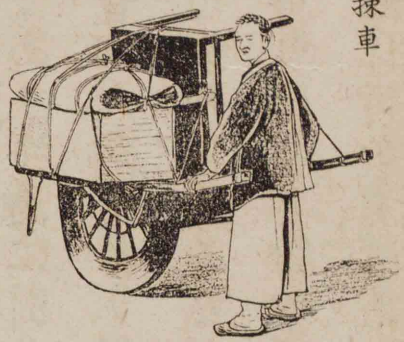
交通運輸の便を與ふるもの、陸に車、水に船、其の種類も
多く、其の形状も様々なり。上古の舟車と今日の汽車、汽
船とをくらべんには、誰か人智の進歩の大なるに驚か
ざらん。

二物相待つに非ざれば用を爲し難きを「車」の兩輪の如
し。といへども、四國の猫車、臺灣の抹車さくちやの如きは唯一輪
なり。自轉車の兩輪が前後に並べるも
亦様變れり。我が國に最も普通なるは
荷車、人力車等にして、荷車には人の引
くあり、牛馬に引かしむるあり。
昔都大路をねり行きたりし絲毛の車
は如何に優美なりけん。今は兩陛下も
馬車に召し給へば、古風の牛車は博物
館に行かずば見るべからず。都會の地

猫車



揀車

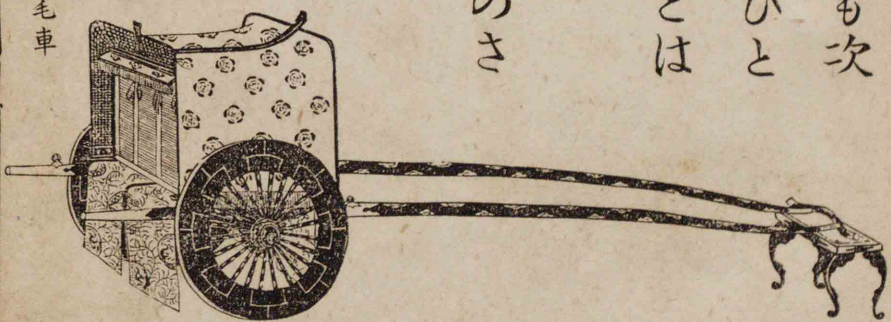


には電車自動車等も次第に多く行はれて、ひとへに速力を競ふ世とはなれり。

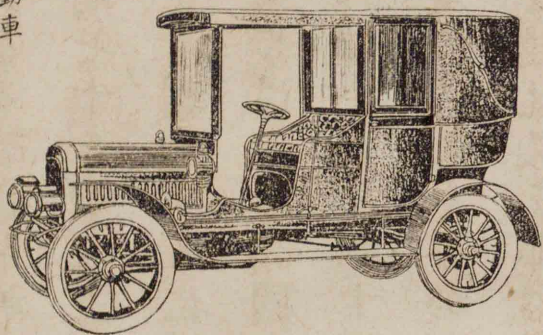
小歌交りに老船頭のさ

をさし行く乗合舟ののどけさよ。筋骨たくましき若者が艚を揃へて漕ぎ出す漁船の勇ましさよ。荷足高瀬茶船屋根船等其の目的により、大小構造千差萬別あり。和船の大なるは

絲毛車



自動車



五百石積千石積等ありて、近海を航行すれども、櫓はおほむね一本なり。西洋形の帆前船には二本三本の櫓あるもあり。帆の運用自在なれば、風の方角に關らず、十分に風力を利用することを得。スチブンスンの造りし機關車は、今日の完備せる機關車にくらぶべくもあらず。フルトンの始めて造りし汽船は、今の小さき川蒸氣程の大ききなりしならん。其の後百年間の發達は蒸氣機關の上に

多大なる改良を加へたるを以て、今や列車の速度は一時間七十五哩以上に及ぶものあり。四萬噸前後の大汽船をも製造するに至れり。かくの如くにして、汽車汽船の進歩は世界諸國をして日に益、接近せしむ。思へば今より六十年以前には、我が國に一哩の鐵道も、一隻の汽船もなかりしなり。今や全國鐵道の延長六千哩を越え、又支那沿岸はおろか、印度南洋より亞米利加あめりか歐羅巴よーろっぱの航路をも開くに至れり。國運發展の速なること實に驚くにたへたり。

軍事上に用ふる車には、砲車、材料車、輜重車しちゆう等種々あり。

重砲車の如きは十頭の馬をして引かしむ。大小幾多の軍艦は海上の浮城とも稱すべく、遠く四方に航行して、到る處に國光をかゞやかせり。

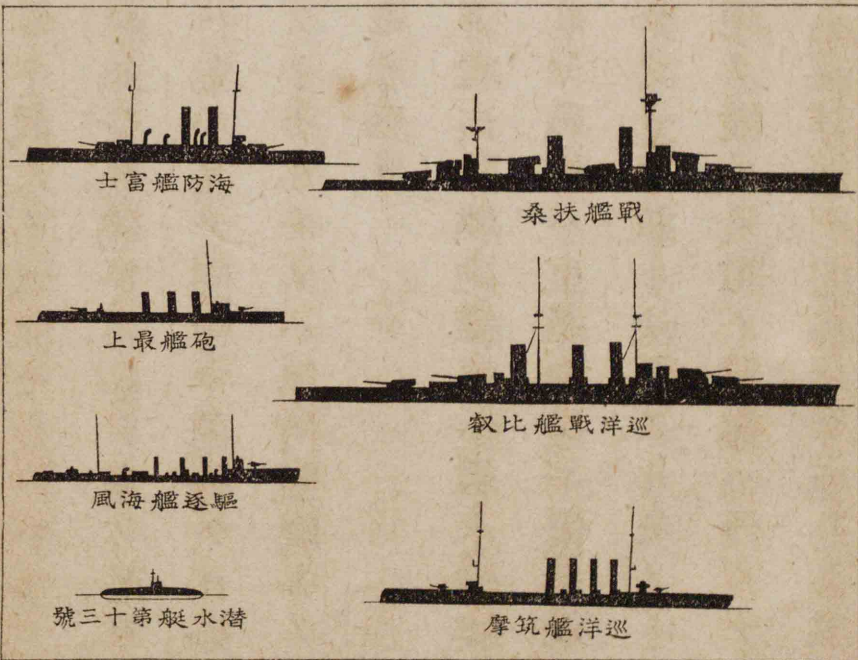
近年は航空機の發明諸國に起りて、すでに軍事上にも應用せらるゝに至れり。空中交通の開始せらるゝも決して座上の空談にあらざらんとす。人智の進歩は際限なしといふべし。

第八課 我が海軍

諸子ハ數多アル我が軍艦ノ名ヲ知レルナルベシ。國名ヲ以テ名ヅケラレタルモノニハ、攝津河内安藝薩摩肥

追情

等はナリ。巡洋艦ハ攻撃力防禦カノ大ナルコトハ戦艦ト大差ナシ。其ノ大ナル速カヲ利用シテ、戦艦ト共ニ敵ノ主力ニ當リ、又敵艦隊ノ情勢ヲサグリ、或ハ之ヲ追撃スルヲ任務トス。金剛比叡霧島榛名鞍馬伊吹等はナリ。



耳港

獲

專

巡洋艦ハ軍艦中最モ任務ノ多キモノニシテ、戦艦巡洋艦ト共ニ敵ニ當リ、或ハ其ノ耳目トナリテ、敵ノ港灣及ビ敵艦ノ情勢ヲサグリ、或ハ我が驅逐艦水雷艇運送船商船ヲ保護シ、或ハ敵ノ驅逐艦水雷艇運送船商船又ハ之ヲ保護スル軍艦ヲ撃沈捕獲スル等ノ事ニ當ル。其ノ艦體ニ大小ノ差アレドモ、何レモ多量ノ石炭ヲ積ミ、大ナル速力ニテ長時間航海スルコトヲ得。出雲磐手淺間常磐平戸矢矧筑摩ナド之ニ屬ス。海防艦ハ專ラ自國ノ沿岸ヲ護ルコトヲ任務トス。富士石見相模橋立等はナリ。

砲艦ハ或ハ敵ノ沿岸ニ近寄り、或ハ河江ヲサカノボリ、敵ノ陣地ヲ攻撃スルヲ任務トス。サレバ艦體小サク、船脚ハ淺シ。淀^モ最上^{ガミ}宇治隅田^{フシ}伏見^ミ鳥羽^ト等是ナリ。驅逐艦ハ艦體輕ク、速力最モ大ニシテ、敵艦ニ近ヅキ、魚形水雷ヲ發射^{シヤ}シテ之ヲ擊沈シ、又敵ノ驅逐艦水雷艇潜水艇ヲ驅逐擊破スルヲ任務トス。水雷艇ハ形體甚ダ小ニシテ、速力驅逐艦ニ次グ。敵艦ニ近ヅキ、魚形水雷ヲ發射シテ、之ヲ擊沈スルヲ任務トス。潜水艇ハ水中ヲ潜航シ、水雷ヲ發射シテ、敵艦ヲ擊沈スルヲ任務トス。以上ノ外、尚水雷母艦工作船給炭船等ノ

如キ特別任務ヲ有スルモノアリ。又近年ハ飛行機モ次第ニ使用セラル、ニ至レリ。四面皆海ナル我が帝國ハ、國家防禦ノ上ヨリイフモ、商業保護ノ上ヨリイフモ、常ニ強大ナル海軍ヲ有セザルベカラズ。

第九課 臺灣より樺太へ

一別以來御變りもこれ無く候や。當地にてはてはとくに苗の植付も終り、南部にてははや稻の花盛りの由に御座候。御地は今尚冬の季節と存候。當總督府の經營も着

着其の効を見るに至り候事、かねて御承知の通りに候處、いよく實地見聞致候へば、聞きしにまさる進歩に驚入候。當臺北市街の如きは、近年市區を改正し、街路井然、總督官邸をはじめ建築物の壯大なる、内地にても見る能はざる程に御座候。北方の臺灣神社に參拜すれば、そゝろに當年を追懷するの情にたへず候。今や西部縱貫鐵道も全部開通致候事とて、交通の利便いよく開け、産業の發達は益多

望に相成候。先月は官命により南部地方へ出張致候。南部の打狗安平、北部の淡水基隆の諸港は本島の四開港場にこれあり、其の外支那形船に限りて許されたる數多の開港場もこれあり候。基隆港の大規模の築港も遠からず落成致すべく、打狗の築港も唯今盛に工事中に御座候。本島産物の重なるものは、御承知の樟腦米、茶、砂糖等にて、樟腦は世界産額の八分の五を占むる由に御座候。茶は主として

北部に産し候。其の外金材木塩等も年々
其の産額を増加する模様。に御座候。米田
は全平地の二分の一を占め居候。耕作に
水牛を使用する様も珍しく、又平田に廣
東婦人が隊を成して草取を爲す有様は
殊に興味を覚え申候。

中部の山林には樟松杉檜檜椎等の繁茂
著しく、榕樹は南部に多く見受け候。其の
氣根の地に入りて、數幹數十幹入亂れて
一大樹を成したるは見事に御座候。竹に

も直徑一尺以上のもの
これあり、是にて竹
筏といふ臺灣特有の
船を造り候。又竹を原
料として竹紙を製造
致居候。臺南は南部の
大都會にて、附近に名
所舊蹟の多き所に御座候。南部地方には
製糖業盛に行はれ居候。阿里山の檜材は
世界無比の良材と稱せらるゝものにて、



中には直徑二十尺餘、一樹にて千五百尺
 ノの材積を得るものもこれあり候由、山
 林の富のみにてても無盡藏と申すべく候。
 全島の住民は約三百餘萬と申候。其中
 内地人は八萬餘、蕃人はんじんは此の外にて約十
 一萬と申す事に候。教育の事業も段々進
 歩し、蕃人も追々皇恩に浴する様に相成
 候事、國家の爲眞に大賀の至に御座候。當
 總督府にて出版相成候臺灣寫眞帖てい一部
 郵便にて差出候間、御覽下され度候。草々。

五月二十日

徳太郎

仁吉様

第十課 熊王丸

吉野の朝の頃、赤松みつのり、くすのき光範楠木まさのり正儀と攝津せつの住吉に戦ひ
 て、散々に撃破られたり。此の時討死せる宇野うの六郎の一
 子に熊王といふ者あり、一日光範に向ひて、

「正儀は主君の敵にて、我が爲にも父の仇なり。如何に
 もして討取り申すべし。是より御いとま賜はり、河内かはち
 に行きて正儀に仕へん。いまだ幼ければ、敵も心をゆ
 るすべく、たとひ用心きびしくとも、長き間には必ず

許

討取るべき折に出會ふべし。」

と涙を流していふ。光範

「幼き身を唯一人敵國へやらんも心許なし。また我に代りて討死したる六郎の形見とも思ふものを。」

とて固く止めしが、

「年長じては敵も近づけ申すまじ。幼き時に参りてこ

そ。

としきりに望めば力及ばず、

「さらば是にて本意を遂げよ。」

とて、常に身を離さざりし名刀を與へて行かしめたり。」

遂

熊王直ちに河内に行きて、赤坂城のほとりにたゞずむ。

正儀の臣兵庫介忠元ひやうごのすけただちあやしみて、「何者ぞ。」と問へば、

「赤松光範の臣宇野六郎の子なり。住吉の戦に父の討

死したる後、一族の者領地をうばひて、我を追出した

り。光範と心を併せての事とて、如何ともし難ければ、

佛門に入りて父の後をとぶらはんとて、かく諸國を

巡り歩くなり。」

と答ふ。忠元あはれみて、己が家に連歸り、様々に勞りて、

かくと正儀に告ぐるに、正儀は情深き武士なれば、呼出

して召使ひたり。

情 己 歩

忌

月日は流るゝ水の如く、熊王十五歳になりぬ。正儀は河内にて領地を與へんとしたれども、熊王は「何の戦功もなければ」とて受けざりき。
 あくる年は六郎の七回忌なり。いよく忌日になりて、熊王今夜こそ正儀を討ためと、ひとり心に思ひ定めたるに、正儀はかくとも知らず、今日は吉日なり、元服せよ」とて、もとゞりを上げて、和田小次郎正寛まさひろと名乗らせ、天皇より賜はりし具足一領を取出して與ふ。熊王恩に感じて、涙せきあへず、夜に入りて、討つべきは今なりと、心を取直せども、年頃の恩愛、殊には今日の元服の事等思

疑

號

ひ續けては、如何でか討たるべき。幾度か思ひ直して討たんとすれども、少しも疑ふ心なき正儀の様を見ては、刀のつかに手をかくべきやうもなし。思はず大聲をあげて泣號なげひぬ。
 正儀驚きて、如何にしたるぞ」と問へば、熊王年來包みたる心の中を打明けて、今は自ら死ぬるより外なし」とて、刀を取直して腹かき切らんとす。居合せたる人々涙にくれながら、何とて命を捨つるに及ぶべき」と、取つておさへて動かせず。熊王今はせん方なく、其の刀にてもとどりを切放ち、きて往生院に入りて僧となり、正儀より

賜はりたる名の正寛を其のまゝに正寛法師シヤクワンと名乗れり。かくて光範の與へたる刀には事の由を書添へて送り返し、心の變ることもあるべきかとて、其の後は一度も院の門外へは出でざりきとぞ。

第十一課 アラビヤ馬

アラビヤは世界に名高い良馬の産地である。アラビヤ馬の長途の騎行にたへることは實に驚くべき程で、四五日間うち通し、毎日三十里位をかけるのは珍しくない。飲まず食はずに終日終夜走つても尚平然として居るといふことである。

束

論

こゝにアラビヤ馬の達者なことを證明する面白い話がある。昔トルコの或大將がアラビヤ人から一頭の名馬を三千圓で買ふ約束をした。さていよいよ馬を受取る段になつて、大將は今少しまけぬかといふ。馬主はもう一文も引けぬといふ。段々口論の末、大將は怒つて三千圓の金を地に投げつけた。

馬主はしばらく大將の顔を見つめてゐたが、静かに其の金を拾ひ上げ、馬の耳に口を寄せて、何事か話してゐるかと思ふと、ひらりと飛乗つて一散にかけ出した。

「それ馬主が逃げた。」といふので、大將の部下の二三人は

逃ツクリ

速 隔

體 黃金

直ちに自分の馬にまたがつて、其の跡を追つかけた。アラビヤ人は後をふりかへり、絶えず追手と或間隔を保ちながら進んで行く。追手が接近すれば速力を速め、後れ、ば脚のきざみを短くする。遂に暮方になつた。アラビヤ人はこゝに始めて馬に全速力を出させて、雲を霞と逃げのびた。間もなく日は暮れて、夜のとばりは全く馬主の行方をかくした。

追手のトルコ人は如何ともすべき方法が無い。空しく歸つて、騎者騎馬黄金、三つとも失つてしまひました。と報告する外はない。三日目の夕方一同半死半生の體に

惜

欲

なつて歸つて来た。一方にはアラビヤ人の不實を罵りながら、一方には「あれ程の名馬はいくら金を拂つても惜しくはない」と、口々にほめた。

四日目の朝、大將は何心なく外を眺めてゐると、前の馬主が再び馬をひいて来て、

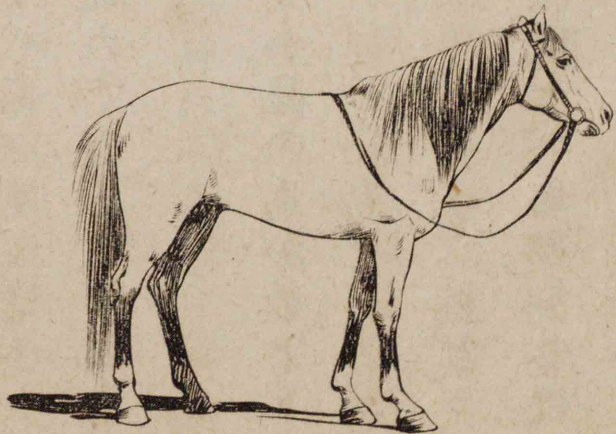
「閣下、三千金が惜しう御座いますか。此の馬が欲しう御座いますか。」

といつた。

アラビヤに良馬の多く産するのは、風土が馬の飼養に適してゐるばかりではない。數千年の久しい間、土人の

絶えてたゆまない丹誠の結果である。古來アラビヤ人は馬を家族の一員と考へて、家長は之を自分の子供と同じ様にかはいがる。馬もよく飼主になれて、其の家族一同と親しんでゐる。或人のアラビヤ旅行日記の一節に次の様なことが書いてある。

馬が子供と遊んでゐるのを見たことがある。やうやく立歩くことのできる三つ四つの子供が、馬の尾を



引き脚をなでて、戯れてゐると、馬はさもうれしきうに、口でおもちやをさゝげて、其の子供をあやしてゐた。此の一事でアラビヤに名馬の産する所以が分つた。

第十二課 笑

笑フ門ニハ福來ル。トイヘリ。

親子夫婦兄弟姉妹ヨク和合スレバ、互ニ相助ケテ各其ノ家業ヲ樂シムヲ以テ、家運自ラ開ケテ一家ノ内笑フコト多シ。故ニ笑フベシ、一家擧ツテ笑フベシ。笑ハント欲セバ、一家ノ和合ヲ計ルベシ。一家和合セザル時ハ家

道次第ニオトロヘテ、笑聲ノ戸ヨリモル、事ナカルベシ。

性 衛

身體健全ナル人ハ、精神モ亦快活ニシテ、耳目ニフル、モノ皆樂シ。心樂シケレバ自ラ笑フ。故ニ笑フベシ、常ニ笑フベシ。笑ハント欲セバ、衛生ニ注意シ、身體ヲ健全ニスベシ。天性快活ナル人モ、身體ノ健全ヲ害スレバ、意氣モ亦オトロヘテ笑フコト少シ。

勉 省

公明正大ニシテ、心中一點ノ曇ナキモノハヨク笑フ。内ニ省ミテ、ヤマシキコトアレバ、勉メテ面ニ笑フトモ、心中ノ苦ヲ如何ニセン。ヨク笑ハント欲スルモノハ、常ニ

嚴

其ノ行ヲツ、シミ、上天ニ恥ヂズ、下地ニ恥ヂズ、外人ニ恥ヂズ、内己ニ恥ヂザル工夫ヲナスベシ。笑ハ心身ノ良藥ナレドモ、時ト場合トニヨリテ笑フベカラザルコトアリ。己ヒトリ樂シトテ、他人ノ悲ヲ思ハズシテ笑フハ同情ノ無キ人ナリ。謹嚴ナルベキ場合ニ笑フハ、禮ヲ知ラザル人ナリ。儀式、公會等ノ席ニテ談笑ヲツ、シムハ我等文明國民ノ美風ナリ。

短 優 歡

他人ノ惡事短所ヲアザケリ笑フハ、己ノ品位ヲ下ス所以ナリ。イハンヤ我ニ優レル人ヲネタミ、其ノ聲譽ヲ傷ツケントシテ笑フ者ニ於テヲヤ。他人ノ歡心ヲ買ハン

トシテヘツラヒ笑フハ、其ノ心事最モイヤシムベシ。花
客ニ接シテ愛敬ヲ盡スハ商人ノ美德ナレドモ、ミダリ
ニ聲色ヲ作リテヘツラヒ笑ヒ、中心却ツテ親切ノ念ナ
キモノハムシロ不愛敬ナリトモ、信實ノ心アルモノニ
如カズ。

第十三課 少年鼓手こしや

フランス軍がアルプ山を越えて、イタリヤへ攻入つた
時は冬の半で、山も谷も雪にうづめられて、吹く風は身
を切るやうに寒かつた。

隊中にピエールといふ年の頃十三四ばかりの少年鼓

手があつた。真先に立つて、太鼓を打ちながら、かひぐ
しく進んで行く。ふと山のいたゞきの方にすさまじい
物音が聞え始めたと思ふと、百雷の一時に落ちかゝる
様なひゞきと共に、山のやうな雪なだれがなだれて來
て、むざんやかの勇ましい少年鼓手は忽ち谷底へはき
落された。

「ピエールよ、少年鼓手よ」と聲を揃へて呼んだが、何の答
もない。静かな山の中に流れる水の音が遠く聞えるば
かり。しばらくすると、谷底の方に太鼓の音がかすかに
聞える。耳をそばだてて聞けば、進軍の調である。ピエー

ルが打ついつもの太鼓に違ない。さては生きてゐるのか。あの勇ましい少年を殺してはならぬ。どうかして助ける工夫はあるまいかと、兵士等は皆氣をもんでゐる。深さは幾百丈とも知れない谷底、谷へ下りる細道も雪や氷にとざされて、どこか全く知れない。打鳴らす太鼓の音は段々に低くかすかになる。おくれ、は、ピエールはこゝえて死ぬであらう。兵士等は氣をあせるのみで、何の工夫もつかぬ。

此の時「自分が行かう」とさけぶ人を誰かと見れば、將軍マクドナルである。マクドナルは此の隊の司令官

で、突貫將軍といふあだ名をもつた勇將である。兵士等は驚いた。將軍は上衣をぬぎすて、はや谷へ下りようとする。兵士等はあわてて異口同音に、將軍の命は我々千萬人の命よりも貴い。ピエールは我々にお任せ下さい。といつて引止める。將軍はどうしてもきかぬ。

「兵士は皆我が子も同様である。我が子の死ぬのを見て父が命を惜しむ理由はない。



大砲のつなをくゝりつけて、早く自分を谷へ下せ。早くしないと、ピエールが死んでしまふ。」としかる様にいふので、兵士は止むを得ず將軍を谷底へ下した。

將軍が谷底へ下りた時には、もう太鼓の音は聞えぬ。聲を限りに「ピエールよ、ピエールよ」と呼びながら、方々を尋ねて、やうくさがし當てたが、少年ははや息も絶え絶えである。手早く帯をほどいて、ピエールの體にくゝりつけて合圖をすると、兵士等は力を合せて二人を引上げた。

將軍の愛情と勇氣によつて、軍中の花が助かつたので、

全軍一同に歡喜の聲をあげた。アルプの山もふるふばかりに。

第十四課 出征兵士

一、行けや行けや、とく行け、我が子。

老いゑる父の望は一つ。

義勇の發御國に盡し、

孝子の譽我が家にあげよ。

二、ぎらば行くか、やよ待て、我が子。

老いたる母の願は一つ。

軍に行かば、からだをいとへ。

彈丸たまに死たまとも、病に死たまな。

三、うましうまし、勇ましうまし。

出征兵士の弟ぞ、我は。

兄君、我も後より行あん。

兄弟共に敵をば討とん。

四、親に事へ、弟を助け。

家を治めん、妹我は。

家の事をば心にかげず、

御國の爲に行きませ、いぎや。

五、ぎらばぎらば、父母ぎらば。

弟ぎらば、妹ぎらば。

武勇のはたらき命さ、げて、

御國の敵を討ちなん、我は。

六、勇み勇みて出で行く兵士。

はげましつゝ、も見送る一家。

勇氣は彼に、情は是に、

勇まし、やさし、を、しの別。

第十五課 招待狀

其の一

拜啓、老父事本年滿六十歳に相達候に付、

來る七月二日の誕生たんじやう日を以て、親族一同
打寄り、心ばかりの祝宴相開き、御心安き
方々御招待致度と存候間、同日午後五時
御光來下され候はば、光榮の至に存候。先
は御案内まで、此の如くに御座候。

其の二

拜啓來る十五日は亡父七回忌に相當り
候に付、午後三時西方寺に於て法會相營
度候間、御多用中恐入候へども、御參列成
し下され候はば、有り難く存じ奉り候。敬

白。

其の三

拜啓、益、御健勝賀し奉り候。かねて御賛同
下され候故、近藤大尉記念碑ひいよく出
來上り候については、來る六月三十日土
曜日午後二時建碑式舉行致候間、御光臨
の榮を賜はり度、此段御案内申上候。敬具。
追て準備の都合もこれ有り候間、御來
會下され候はば、御手数ながら來る二
十八日までに、本町二丁目高野義太郎

宛御一報下され度候。

第十六課 料理

塩梅 濟

人ヲ招待スル時ハイフマデモナク、毎日三度ノ食事ニ
モ、其ノ材料及ビ料理法ニ注意スルコトガ大切デア
ル。同ジ材料デモ、料理ノ塩梅ニヨツテハ、全ク別物ノ如ク
味ハハレ、料理ノ方法ニヨツテハ、其ノ經濟ノ上ニモ大
イナル得失ガアル。

滋

好

業化

成ルベク價ノ安イモノヲ求メ、ソレヲ成ルベクスタリ
ノナイ様ニ用フベク、味ハ人々ノ好ミヲ考ヘテ、多數ノ
満足ヲ買フベキ物ヲ選バナケレバナラヌ。
季節ニ依ツテ、食物ノ選ビ方ニ多少ノ注意ヲ要スル。寒
イ時ハ特ニ體温ヲ維持スル必要ガアルカラ、獸肉其ノ
他アブラ氣ノ多イ食物ガ適當デア
ルガ、暑イ時分ハ其
ノ必要ナク、且胃腸ノ弱リ易イ時デア
ルカラ、アツサリ
トシテ消化シ易イモノヲ取ルノガ
ヨイ。又魚類ヤ野菜
ハ各其ノ季節ノ物ヲ用ヒルト、味
モヨクテ、消化モヨク、
又人々ノ好ミニモ適スル。

食物ハ又變化が大切デアル。日々同ジ食物ヲ用ヒルト、アキ易ク、身體ノ爲ニモヨクナイ。ソレ故材料モ料理法モ成ルベク適當ニ變化サセテ、毎日同ジ獻立^{コングテ}ヲクリカヘサヌ様ニ注意スルガヨイ。例ヘバ動物質ノ滋養品ニハ植物質ノ食物ヲ添ヘ、又汁氣ノナイモノノ次ニハ汁物ヲ出シ、アマイ物ノ後ニハ塩カライ物ヲ配合スル類デアル。其ノ他切方並べ方、色ノ配合ニ至ルマデ、皆ソレゾレノ工夫ガ入用デアル。

常ニ食物ヲ料理スル臺所ハ特ニ清潔ヲ保ツノ必要ガアル。臺所ハ種々ノ食物ヲ置キ、ニ夕キ洗ヒ流シヲスル

所デアアルカラ、流シ元戸ダナヲハジメ、料理道具食器ヲキンナドニ至ルマデ、常ニ清潔ニシテ置カナケレバナラヌ。座敷ヤ庭園ヲ奇麗ニシテ置ク人が、臺所ヲ不潔ニシテカヘリミナイノハヲカシイ話デアル。

第十七課 時間

人生七十年と見るも六十萬時間に過ぎず。其の内寢食談話遊戯病氣等の爲に費す時間は三分の二を占め、實際修學及び業務に用ふる時間は僅かに二十萬時間を越えざるべし。身を立て、父母をあらはすも、産を破り、祖先をはづかしむるも、功業を成し、公益を廣むるも、將又

無爲にして一生を終ふるも、唯此の二十萬時間を利用
するとせざるとにあり。

百歳の長命を保ちて、一生を坐食に費す者あり。二三十
歳の短命にして美名を萬世にとゞむる者あり。人生の
長短は事業の大小を以て量るべく、年齒の多少を以て
量るべからず。之を思へば、一寸の光陰も輕んずべから
ず。

古人の片言隻句も我等が師なり。路傍の一草一木も學
問の種ならぬはなく、街上に落ちたる硝子がらすの一片を去
るも、公衆の利益なるべし。我等の周圍には讀むべき書

多く、學ぶべき物多く、成すべき事限りなし。時間の貴き
を知れる者は無爲に苦しむことなし。然れども人の勢
力には限りあり。活動するのみにて休養することなけ
れば心身いつか勞れて、遂には活動にたへざるに至る。
「よく勉め、又よく遊ぶ」はよく時間を利用する所以なり。
業務に従事する間は熱心に之を行ひて、他事に心を勞
すべからず。又事既に過ぎて、思ふも益なき事に心を勞
するは、時間を徒費すること甚だし。爲したる事に過な
く、後悔することなき者は幸福にして賢き人なり。若し
過あらば、深く之を悔いて、其の過を再びせざらんこと

をちかふべし。思ひても返らぬことをくよくよと心配するは、未練にして愚なる人のする事なり。人を訪問する時は業務をさまたげざる時間を選び、用事終れば直ちに去るべく、又人より訪問を受くる時は直ちに出でて應接すべし。約束の時日を違ふるが如きは時間の賊なり。殊に集會の時間は正しく守らざるべからず。一人の後るゝ爲に多人數をして貴重の時間を空費せしむればなり。例へば六十人の集會に其の中の一人若し十分を後るとせば、六十人の時間の損失は合して十時間となるべし。時は金なり。」といふ古言あれど

も、今日の如く通信交通の機關發達し、社會の活動敏速なる時代にありては、時間は金錢よりも貴し。他人をして時間を損失せしむるは其の罪金錢を損失せしむるよりも重し。

第十八課 畫工の苦心

泉州堺さかみに一國寺といふ寺あり。其の座敷の一間の杉戸ひのきに繪一本を畫がき、他の一間のふすまに鶴二十五羽ばかり畫がけり。此の畫の出來たる由來こそ面白けれ。此の繪をかける畫工久しく此の寺に寄食してありしが、何一つ畫かくこともなく、毎日遊び暮して三年を經

たり。住持は心得ぬ事に思ひて、或時畫工に向ひ、君は畫家として一家を成せる人なるに、三年の間未だ一度も畫筆を取り給ひしことなし。我衣食の費をいとふにあらざれども、何處へなりとも出でて遊び給へ。愚僧も所用ありて京へ上り、一二年在京せんもはかり難し。といへば、畫工「そはいと名残をしき事なり。さらば年來の謝恩に何か書きて參らすべし」とて、心構せし様なりしが、又筆もとらで四五日過ぎたり。或夜小僧住持の居間に來りて、かしこに行きて、彼の畫師の有様を見給へ」とささやくに、行きてうかゞへば、障子に身を寄せて、様々に

姿を變へつゝ、寢起する様なり。さまたげせんも心なしと思ひて、其のまゝ、寢間に歸れり。

翌日畫工の早朝に起出でて畫がけるを見れば、皆ふしたる鶴なり。筆勢非凡にして、丹青の妙いふべからず。かくて次の夜は如何にとうかゞふに、前の如く夜もすがら寢ねずして、明日はかく畫がかんなどひとり言いひ居たり。住持は知らぬ顔して過せしに、十日餘にして鶴二十四五羽を畫がけり。其の後又夜更けてうかゞひ見るに、今度はひちを張り、足をのべ、手を口にあてて、尚も鶴の卧したる様をなせり。夜明けて後、住持畫工に向ひ

て、今日書き給はん鶴の姿はかやうなるべし。」と、夜中のぞき見たる姿をして見するに、畫師は驚きて、「我が畫がかんと思ひ構へしことを如何にして知り給へるか。」と問ふ。そは昨夜のぞき見て知りたり。」といへば、畫師それより後の二枚には畫がかず、唯杉戸に檜一本を畫かきて、東國へ出立せり。

然るに未だ一月もたゞざる内、又再び引返して一國寺に歸れり。住持は驚きて、「東國へ行き給ふと聞きしに、再び歸り來られしは何故ぞ。」と問へば、畫工先に畫がきたる檜の枝に一枝足らぬ所あり、氣にかゝりしが、東國へ

下る路すがら、箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見て、其の意を得たれば、之を書添へんとて、わざ／＼歸り來りたるなり。」とて、一枝を書添へ、別を告げて出で去れりとなん。

第十九課 瀑布

水の奇觀は瀑布に如くはなし。我が國には數多の瀑布あり、古來多く詩歌に入り、畫圖に上る。

日光山には華嚴瀧を始として、霧降裏見方等般若等其の名世に知られたるもの少からず。中にも華嚴霧降裏見を日光の三大瀑布と稱す。最も壯觀なるは華嚴にし

瀧 圖

出

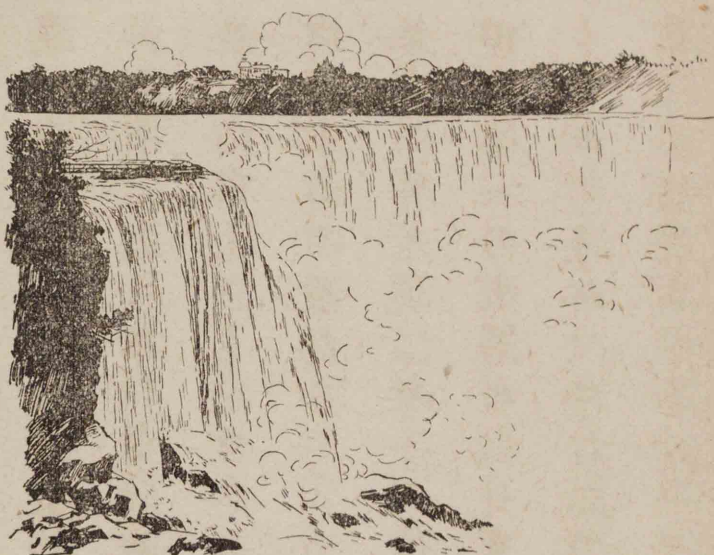
て、直下四十丈の水は絶壁に水晶すいしやうのすだれをかく。中央以下は霧と散り、雨と飛びて、水烟深谷をおほひ、其の瀧つぼの深さは幾十尺なるを知らず。裏見瀧は後の細道より瀧の裏面を望み見るを以て此の名を得たりしが、先年大風雨の爲瀧口の一角崩れ落ち、今は其の奇勝を見ること能はず。霧降瀧は上下二層に分れ、高さ各十四五丈、三瀑布中最も美觀を以て聞ゆ。

紀伊國那智山には四十八瀧あり。最も大なるは第一の瀑布にして、高さ八十餘丈と稱す。瀧の後より山路を上ること四町餘、一條の谷川あり、この水即ちかゝつて第

一の瀑布を成すなり。更に川に沿ひて上れば、第二の瀧あり。又一山を越ゆれば、第三の瀧に至る。上るに随つて、瀧はいよゝゝ小境は益、静かなり。

神戸市かこうべに近き布引瀧は雌雄二瀑あり。美しき瀧にして、眞に白布をさらせるが如し。市民遊覽の地にして、又神戸市水道の源たり。

美濃みのの養老瀧は孝子の傳説を以て其の名天下に高し。世界第一の大瀑布は北米合衆國のナイヤガラなり。ナイヤガラ瀑布は左右二つに分れ、左瀑は幅三百餘丈、右瀑は百餘丈、高さ各約十六丈あり。二瀑相並んで雄を争



其の奇觀眞に名狀すべからず。

第二十課 鶉飼うかひ

ひ、其のひゞき萬雷のとゞろくが如く、大地も爲にふるひ、附近數百歩の地にありては、器に盛れる水常に波紋を生ず。又嚴冬の頃は瀑水落つるに隨ひ氷結して、一面玉山銀臺となり、水のしぶき枯木に氷結して、水晶の花を咲かす。

鶉を使ひて魚を捕ふること、我が國にては古來廣く諸所に行はれたり。中にも美濃みのの長良川ながらの鶉飼は最も名高く、鶉飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鶉飼をおもふに至れり。長良川は岐阜ぎふ市の北を東より西へ流る。市を出でて橋を渡れば長良村あり。此の川上に瀬尻せじり村あり。鶉飼を業とする漁夫は皆此の二村に住めり。

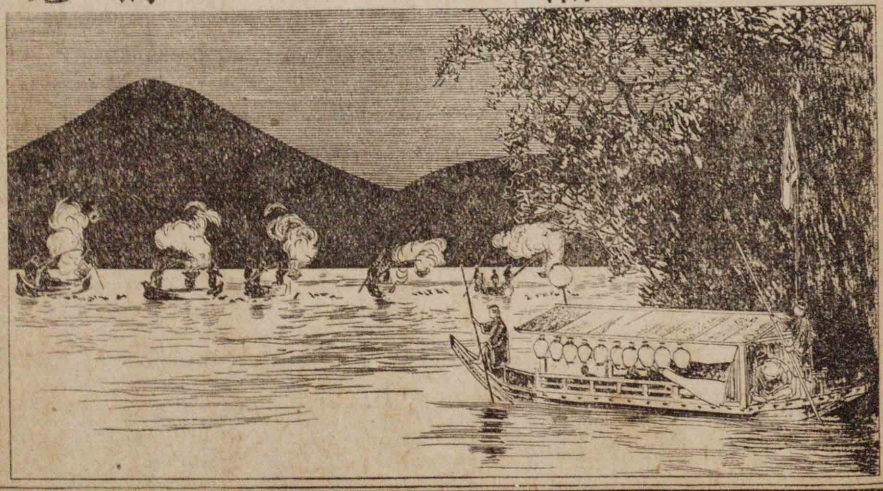
鶉飼は五月中旬に始り、十月中旬に終る。此の間毎夜月なき時をうかゞひて漁舟を出す。觀客は遊船を中流に浮べて、鶉舟の下り來るを待つ。川上にかゞり火の明り

先づ見え初めて、ほうくと呼ぶ聲を聞く内に、舟は早くも目前にせまり来る。鶺鴒匠は古風の風折烏帽子をかぶり、こしみのを着く。かゞり火も亦古代の風を其のままなり。

鶺鴒匠は一人にて十二羽の鶺鴒を使ひ、十二條の細なはを片手に握り、右往左往思ひくくに浮沈するを、たくみにさばきてもつれしめず。此の間に鶺鴒を引上げて吞みたる魚を吐かせ、再び之を水に放ち、又かゞり火に薪を添ふるなど、其の手續實に驚くべし。

ふなばたを打つ音、ほうくと呼ぶ聲、水に飛散る火の

この光にはげまされて、鶺鴒は盛に活動し、ひたすら其の獲物の多からんことを競ふ。鶺鴒の首元は細なはにてしばりたれば、捕へたる魚を腹中に吞下すことなく、大なる鶺鴒は能く十二三尾のあゆを喉元にふくむといふ。鶺鴒の鮎を吞むは必ず頭よりす。くはへたる魚をふりかへて、頭より吞下す早業は、鶺鴒匠のなはさばきよりも一層の見



底

物なり。鰻うなぎをくはへてくちばしに巻附かれ、持て餘して見ゆるもをかし。かゞり火をたくは魚を集めんが爲なるのみならず、又鶉をはげます一法たり。魚は火の光を追ひて集り來り、水底にうつる鶉の影に恐れて、水面近く浮ぶが故に、鶉は深く沈まずして、たやすく魚を捕ふることを得るなり。

彼方
彼處

鶉はくゞり入る毎に獲物なくして浮び出づること少ければ、漁夫は一時間餘にして數千百尾の鮎を得るを常とす。數隻の漁舟相並び、波にくだくるかゞり火の下に、百にも近き鶉、此方に浮び、彼方に沈み、彼處にかくれ

此處

此處にあらはれ、之を取圍みて、數十隻の遊船、岐阜提灯ぢやうちんの光を水にうつせる奇觀は筆も言葉も盡し難し。鶉うなぎはを引上げて、鶉のふなばたに立並べる時、半月金華山きんくわの上に出でて、川風たもとを拂ふも快し。

第二十一課 紡績

紡績

我が國ノ機械工業中最モ盛ナルハ紡績事業ニシテ、殊ニ綿花紡績其ノ大部ヲ占ム。年々一億圓ノ綿花ヲ輸入シテ、綿絲又ハ綿布トシ、内國ノ所用ヲミタシテ、尚海外ニ輸出スルモノ五千萬圓以上ニ及ブ。紡績工場ニ入りテ見ヨ。蒸氣機關ノ力ニヨリテ自動ス

ル機械ハ、幾臺トナク立並ビテ廻轉スベク、其ノ作業ノ速ニシテ整然タルニハ、何人モ驚クナルベシ。

先ヅ綿花ヲ俵ヨリ出シテホグシ、土砂其ノ他ノ雜物ヲ去リ、鐵棒ボツニマキテ、長サ四尺バカリ、直徑尺餘ノ筵綿ムシロトス。之ヲ紡績作業ノ第一段トス。皆機械ニヨリテナサル。其ノ作業ノ間ニハ綿花ノ細片四方ニ飛散シテ、吹雪ノ風ニクルフガ如ク、機械ノ前ニ立テバ全身忽チ白シ。

既ニ筵綿トナレバ梳綿機ソウメンニカク。コレニハ細小ノ針金ニテ作りタルブラシノ仕掛ア



筵綿

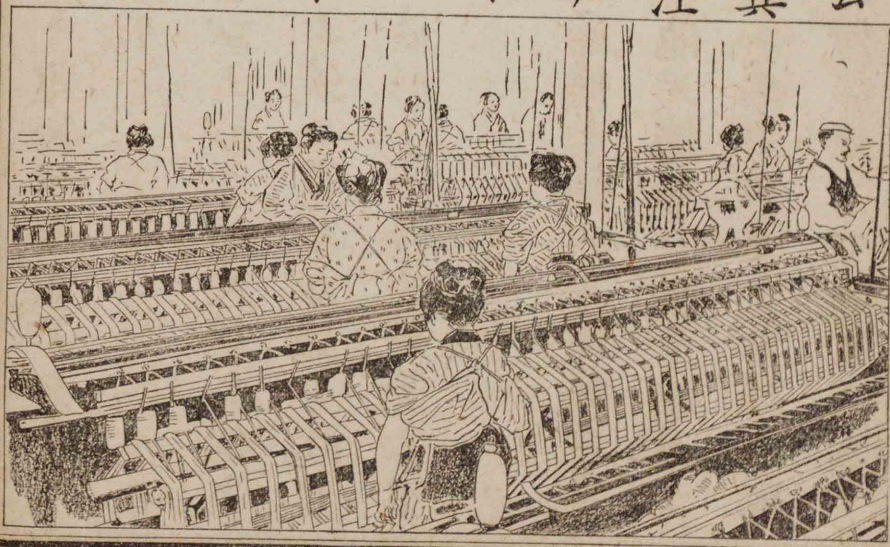
リテ、筵綿ヲ引延シナガラ細カキ雜物ヲ去ル。アタカモ人ノ頭髮ヲクシケヅルニ似タリ。

梳綿機ヨリ出ヅル綿花ハ眞白雪ノ如ク、四尺程ノ幅トナリテ進ム様精巧ナルレースノ流ヲ見ルガ如シ。此ノ流ハ自ラ集メラレテ、親指大ノ篠形シノトナリテ鐵管ノ中ニ入ル。

既ニ鐵管ニ滿ツレバ、コレヲ練篠機レンシヤト稱スル機械ニカケテ、或ハ合シ、或ハ延シ、又更ニ他ノ機械ニ移シ、イヨイヨ延シテ、イヨノノ細クシ、次第ニヨリヲカケテ絲ノ形ニ近ヅカシム。サテ最後ニ精紡機ニ移シテ、適當ノ太サ

トナシテ、更ニヨリヲカケ、ツム
 ニマキトラシム。工女ハ常ニ其
 ノ前ニ立チ、絶エズ絲ニ目ヲ注
 ギテ、切ルレバ直チニ之ヲツナ
 グ。熟練ト機敏トヲ要スルコト
 大ナリ。上手ナル者ハ一分時ニ
 ヨク十數本ノ絲ヲツナグトイ
 フ。

昔ノ絲車ニテ紡グ時ハ、一本ノ
 ツムニ一人ヲ要スベキニ、今ハ



僅カニ、六七人ノ工女ニテ、能ク二千本ノツムヲ扱フコ
 トヲ得ベシ。加フルニ彼ノ蠟燭ノ心トスル太キ絲、蜘蛛
 ノイノ如キ細キ絲、細大意ノマヽニシテ、手紡ノ如ク不
 揃トナルコトナシ。機械ノカハ驚クベキモノニアラズ
 ヤ。

第二十二課 蟲の農工業

蠶の絲を吐きて繭まゆを造るは紡績の業に等しく、葉卷蟲
 の絲にて葉をつゞり合するは裁縫の業に同じ。蜜蜂みつばちの
 蜜を吐き、又たくみに巢すを造るは醸造の業と建築の業
 とをかねたりといはんか。

條

蜘蛛は其の體より絲を出して網を張る。網を張らんとする時は、先づ幾條かのやゝ太き絲を渡し、之を本として、次第に細き絲をかけ、終に完全なる網を造る。此の網にて蟲を捕ふるは、漁業の類とも見るべし。
蚯蚓は地下に穴をうがちて住み、多量の土を吞込みては之を地上の穴の口に出す。かくて數年の後には、地面に近き土をば全く上下にうち返すといふ。農夫の田畑を耕すに似たらずや。

蟻は油蟲を養ふ。油蟲は植物の若芽、若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、身體より絶えず甘き汁を出

甘

牧

部屋

すものなれば、蟻は此の甘き汁を得んが爲に、油蟲の附着せる植物に集りて之を保護し、或は其の卵を他の植物にうつして成長せしむ。是即ち一種の牧畜なり。
蟻は其の種類によりて種々の巢を造れども、多くは地下に穴をうがちて、部屋廊下を造り、其の内面を壁の如くに固む。熱き地方の白蟻は周圍十間、高さ三間にも達する小山の如き巢を造り、木質にて内部を圍むといふ。熟練なる土木技師ともいふべし。

アメリカの一地方に産する蟻の一種に收穫蟻といふものあり。一種の草の實を食用とするを以て、常に此の

獲

草の多く生ずる所を選びて住み、周囲の雑草を食切りて、ひたすら此の草の成長を保護し、其の實の熟して地に落つるを待ちて、其の巢に運び去る。是即ち農業の收穫に異ならず。

第二十三課 物の價

物の價は効用あることと、隨意に得られざることによりて生ずるものなり。故に隨意に得られざるものなりとも、効用なきものは價あることなく、効用あるものなりとも、隨意に得らるゝものは亦價あることなし。例へばこゝに一種の石あり、極めてまれにして隨意に得

られざるものなりとも、飾にも實用にもならざるものならば、之を買ふものなく、随つて價あることなし。日光空氣の如きは、人の生命を保つに必要なれども、隨意に得らるゝものなれば、之を買ふ必要なく、随つて亦價あることなし。水の如きも亦然り。されど水は大都會などにては、時として價を生ずることあり。是飲料水とぼしくして、意のままに之を得ること能はざればなり。物の價の高下は主として需要と供給との關係によりて定まるものなり。しかして供給の需要よりも少きときは物の價は高くなり、多きときは安くなるなり。例へ

ばこゝに一戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人あるときは、其の五人は各其の家の他人の手に渡らんことを恐れて、争ひて高き價をつくべし。かくて其の家の價は段々高くなりて、最も高き價をつけたる人の手に渡るべきなり。

之に反して、同様なる賣家五戸ありて、買はんとする人唯一人なるときは、賣家の持主五人は各其の家の賣れざらんことを恐れて、争ひて其の價を低くすべし。かくて其の家の價は段々安くなりて、最も價を低くしたる人、其の家を賣ることを得べきなり。

物の價はかくの如く需要供給の關係によりて、或時は高く、或時は安くなるものなれども、常に其の物を製造する費用と相當の利益とを併せたる金額に等しからんとする傾きあるものなり。此の金額を普通の價といふ。例へば靴を用ふること流行して、買手にはかに増すときは、靴の價はにはかに高くなりて、靴屋の利益非常に多かるべし。かゝる時は靴屋は更に多くの職人を雇ひ入れて、盛に之を製造すべく、又他の職業に従事する人も靴屋の利益あるを見て、之に轉業するに至るべし。かゝる時は靴の供給次第に増來り、靴の價はやうやく

對

安くなりて、普通の價に復するか、場合によりては尚それ以下に下るべし。

又之と反對に、價次第に安くなりて、普通の價よりも下るに至る時は、次第に其の製造高を減ずるが故に、供給も随つて減じて、又普通の價に復するか、場合によりては尚それ以上に上るべし。即ち物の價は普通の價を本として上下すと知るべし。

物の價はかく上下するものなれども、供給に限りある物例へば名高き古人の書畫古器物などの如きは、需要増すに隨ひて、其の價益、高くなり、需要の減ずるに非る

況般

凍 嚴 略



よりは安くなることなきなり。即ち供給を増加し得る物とは大いに其のおもむきを異にすと知るべし。

第二十四課

樺太からふとより臺灣へ

光陰矢の如く、南北に別れ候より最早一箇年に相成候。先般御手紙にて御近況を承知致し、御なつかしく存候。其の後日々業務に追はれ、餘り旅行も致さず候へども、見聞取交へ、新版圖の狀況大略御報知申上候。御承知の通り、冬は寒氣嚴しく、地面は三尺の下まで凍り、海岸も海水厚く

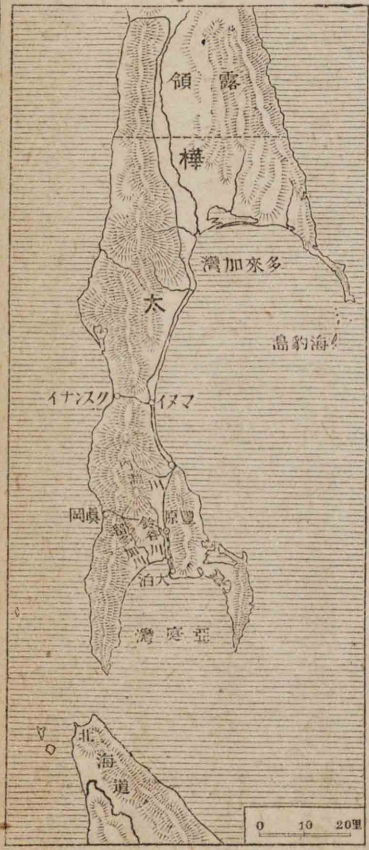
凍結し、流水の流れ来る事もこれあり候へば、一月より三月まで凡そ三箇月間は航路殆ど全く絶え、西海岸の眞岡港のみ唯一の不凍港として僅かに内地との交通を保ち居候。併し夏は氣候温和にして、至つて凌しのぎよく候。

南北に細長き島を山脈縦に走り候へば、平野少く候へども、南部の鈴谷川すずか内淵川ないぶち留多加川るまたかの流域りゅういきの如きは、地味肥え、有望の農業地に御座候。大泊おほとまりは樺太島の入口

とも申すべく、全島第一の良港に候。是より一條の大道遠く北へ通じてロシヤ領に入候。其の南部は車馬の往來自在にして、こゝに樺太廳の所在地豊原とよはらあり、鈴谷川平野の中央に位し、大泊より十里、輕便鐵道も出來居候。又豊原より眞岡に至る間も近時道路新に開け、交通大いに便利に相成候。日露の境は幅五間餘を一文字に森林を伐りすかし、東西三十三里、四箇所に境界石を置きて、分明に相成居候。帝

國領の中部クスンナイとマヌイとの間は最も狹く、且山脈低くして、東西の交通最も便利なる所に御座候。

樺太にて最も有望なるは漁業にて、鯨と鱒との漁利は殊に多く、鮭鱒も亦少からず候。鯨の主産地は西海岸及び亞庭灣、鱒



の主産地は東海岸にて、春夏の交産卵の爲鯨の群をなして海岸近く寄來る時は海水爲に白色を呈し、特殊の網を用ひずとも、獺網にてすくひ取るを得る程にて、實に壯快なるものに御座候。多來加灣頭に小さき海豹島あり、夏より秋にかけてこゝに集る膾炙は數千頭にも達することこれあり候。漁業に次ぎて有望なるは農業と林業とにて、農産物の種類は北海道と大差なく、大麥小麥燕麥裸麥菜種

麻馬鈴薯豌豆等の收穫多く、又牧畜にも
 適し候。森林は内地及び北海道に於ては
 見るを得ざる廣大なる天然林にして、椴
 松蝦夷松落葉松白樺等一面に生ひ茂り、
 之を伐採せば少からぬ収益と相成るべ
 く、又山脈の兩がはには石炭層各所にあ
 り、殆ど無盡藏に候へども、未だ盛に採掘
 に着手せらるゝには至らず候。
 ロシヤにて早くより開拓に力を用ひた
 るは主として五十度以北に候。五十度以

南我が帝國の領土となりしより、諸種の
 經營追々成功致候へども、今後尚着手す
 べき事は多々これ有り候。新版圖の事に
 候へば、本島の開拓は我々國民の最も力
 を用ふべき所に候。住めば都とやら、此の
 極北の寒地も今ははや生れ故郷の如き
 心持に相成候。極南暑熱の御地にても同
 じことと存候。拜具。

九月二十日

徳太郎様

仁吉



第二十五課

諸葛孔明

末 賢 訪 羽

支那ノ昔後漢ノ末、天下麻ノ如ク亂レテ、英雄四方ニ起レリ。劉備ハ漢朝ノ末流、英明ニシテ大志アリ。漢朝ノ復興ヲ圖リ、シキリニ賢士ヲモトム。此ノ時諸葛孔明トイフ人アリ、民間ニ在リテ耕作ヲ事トセシガ、才名世ニカクレナケレバ、劉備ハ三度マデモ其ノイホリヲ訪ヒ、遂ニ迎ヘテ重臣トセリ。

劉備深ク孔明ニ信賴シ、一々其ノ言ヲ用ヒシカバ、關羽、張飛等ノ諸將之ヲヨロコバズ。備サトシテ曰ク、我ノ孔明アルハアタカモ魚ノ水アルガ如シ。願ハクハ再ビイ

相 政

從

フコトナカレト。是ヨリ諸將マタイフ者ナカリキ。

孔明、劉備ニ事ヘ、出デテハ軍師トナリテ謀ヲ運ラシ、入ツテハ首相トナリテ政ヲ行ヒ、遂ニ備ヲタスケテ蜀ノ國ヲ建テ、天下ヲ三分シテ其ノ一ヲ保タシム。備崩ズルニ臨ミ、後事ヲ孔明ニユダネテ、我ガ子若シタスクベクンバ、之ヲタスケヨ。若シ不才ナラバ、君自ラ之ニ代レトイヒシニ、孔明淚ヲ流シテ、臣アヘテ死カヲ盡シ、忠節ヲ致スベシト答フ。備又其ノ子ニ向ヒテ、汝ハ孔明ト共ニ事ニ從ヒ、之ニ事フルコト父ニ事フルガ如クセヨトイフ。

孔明是ヨリ幼主ヲ輔ケ、益心ヲ用ヒテ民福ヲ計リ、忠義ヲ盡シテ變ラズ。蜀國ノ魏吳二強國ト相對立シテ、常ニ其ノ勢力ヲ維持セシハ、主トシテ孔明ノ力ニヨレリ。孔明ハ魏ヲ攻メテ支那中央ノ地ヲ取り、漢朝ヲ興復セントシ、先ヅ南方ノ亂ヲ平ゲ、遂ニ自ラ諸軍ヲ率キテ北征ス。發スルニ臨ミ、表ヲ上ル。言々皆忠君ノ至情ヨリ發ス。後人曰ク、出師ノ表ヲ見テ泣カザルモノハ人ニ非ズト。

孔明ハ沈着ニシテ、機ニ臨ミ、變ニ應ジテ、智謀百出セリ。サキニ蜀ノ南方亂レシヤ、孔明謀ヲ以テ其ノ將孟獲ヲ

捕へ、蜀軍ノ陣營ヲ示シテ、此ノ軍備ヲ何ト見ルト問フ。孟獲答ヘテ曰ク、此ノ如シト知ラバ何ゾ敗レント。孔明笑ヒテ之ヲ放チ、再ビ戰ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。カクスルコト七回ニ及ビシカバ、賊將歎ジテ、公ハ天授ナリ、敵スベカラズトテ、マタ反スルコトナカリキ。其ノ度量ノ廣大ナルヲ知ルベシ。

孔明ハ嚴正ニシテ甚ダ規律ヲ重ンジタリ。或時將軍馬謖孔明ノ軍令ニソムキテ大敗ス。孔明謖ノ舊功ヲ惜シミシカド、軍律ヲ亂サンコトヲ恐レ、涙ヲフルツテ之ヲ斬リ、又自ラ責ヲ引イテ位三等ヲ下セリトゾ。

孔明魏軍ト對陣ノ中ニ卒ス。蜀ノ軍其ノ棺ヲ護リテ國ニ歸ラントス。魏將司馬仲達聞キテ之ヲ追フ。蜀ノ軍少シモサワガズ、旗ヲ反シ、鼓ヲ鳴ラシテ仲達ニ向ハントスルモノノ如シ。仲達アヘテ近ヅカズ。時ノ人死セル諸葛、生ケル仲達ヲ走ラス。トイヘリ。後仲達孔明ノ陣營ノ跡ヲ觀テ、孔明ハ天下ノ奇才ナリ。ト歎ジタリ。又魏軍ノ蜀ニ攻入リシ時、魏將ハ孔明ノ墓ヲ祭り、士卒ニ令シテ、其ノ附近ノ草ヲ刈リ、薪ヲ伐ルヲ禁ジタリトイフ。

第二十六課 朝鮮の風俗

朝鮮の地に上陸して、第一に目につくのは、家の低くて

小さい事である。町には瓦屋根の家もあるが、田舎は大抵藁屋根ばかりである。

朝鮮は夏も暑いが、冬は又案外に寒い。家の構造は主として寒さを防ぐ様に出來てゐる。床下に土石を盛り、數條のみぞを造つて、一方の口から火をたいて室内を温める。之をオンドルといふ。室が廣く、天井が高いと温りにくいから、成るべく狭く低くする必要がある。是が朝鮮の家の小さくなつた重なる原因である。

此のオンドルがある爲に、普通の家では冬でも夜具を用ひない。オンドルにたく薪がないと、冬が越せないか

ら、朝鮮では「米のないのは辛抱も出来るが、薪がなければ生きてゐられぬ」といふ意味のことわざがある。



第二に目につくのは白い着物である。男はゆるやかな股引もひきをはき、胴衣たみぎを着けて、其の上に長い上衣を着る。上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。女は短い上衣を着て、西洋婦人の用ひる様なゆるやかな袴はかまを着ける。男の冠をかぶり、其のひもを長くたらし、小馬

に乗つて、田舎道を通るのを見ると、昔の人に會つた様な氣がする。

まだ冠禮を行はなは者者はチチンガンガといつて、髪を三つ打ちにして後へたらしめてゐる。チチンガンガの間は人に侮られるから、成るべく早く冠禮を行ふ。金がなくて、冠禮の行へない者は、三十を過ぎてもチチンガンガで、大人の仲間入が出来ない。近年は斬髮の風が行はれて、冠禮は段段すたれて行く。

死人を葬るのに、小高い所で南に面してゐる日當りのよい地を選ぶ。貴人の墓には内地の様に石をたてるけ

れども、普通の墓は大抵土を盛上げるばかりである。都市村落の周囲の山や岡には、まんぢゆうの様に圓く盛上げた土山が數知れず並んでゐる。

朝鮮人は煙草を好む。きせるは身分の高い人程長いを用ひる。長いのは四尺もある。

婦人は室内に引込んでゐて、來客に會ふことも、外出すること、も少い。京城地方の婦人がたま／＼外出する時には、うちかけの様なものをかぶつて、目ばかり出してゐる。上流の婦人は四方を閉ぢた輿こしに乗つて、外から見られない様にする。朝鮮人は餘り衛生に注意しないが、

婦人の着物をよく洗ふことは感心である。寒風身を切る様な冬の日でも、氷の下の水をくんでせんたくする。暑い時分汽車に乗つて朝鮮を旅行すると、どこの山陰かげにも白い着物が乾してある。秋の夜長には衣打つきぬたの音が村々相應じて聞える。

第二十七課 平和なる村

我が村には戸數三百、人口千四百餘あり。全村農業を以て生計を立つ。村の財産家に勸業に熱心なる人あり、自ら先んじて耕作、養蠶、養雞、養魚等の模範を示せしを以て、近年作物の改良も出來、又桑を植ゑ、蠶を養ふ者多く、

編

雞を飼はざる家なし。何れの家にて卵を賣れば、其の
 代金にて一年中用ふる塩醬油を買ふに餘あり。池には
 大抵鯉鮒等を養ひて、二年毎に之を賣るに、其の利少か
 らず。又麥稈眞田を編み、花筵を織ること行はれ、十二三
 歳の少女も手を空しうする者なきに至れり。されば全
 村頗るゆたかにして、皆其の家業を樂しめり。
 村役場と學校とは相並びて村の中央に在り。村長は村
 の舊家に生れ、極めて親切公平なる人なれば、深く村民
 に敬愛せられ、幾度の改選にも常に選舉せられて、二十
 餘年間勤續せり。校長も着實温厚なる人にして、生徒を

勵
兒童

可
豫

愛すること子の如く、生徒も亦校長をしたふこと父母
 の如し。其の他の教員も校長を模範として、職務に勉勵
 するが故に、兒童は皆よく之になつきて、學校を思ふ心
 厚く、卒業後も尚學校の門に出入するを樂みとせり。
 村會議員も全村一致して之を選舉し、互に競争するが
 如きこと更になし。村會にて村費を議するにも、大抵原
 案を可決するを常とす。或年暴風雨の爲に不作なりし
 ことあり、其の翌年學校の經費を議するに當り、村會に
 ては其の豫算の不足なるべきをうれへて、之を増加せ
 んとせしに、村長は「不作の後なれば、成るべく經費を節

約したしとの校長の意見によりて豫算を編成したるなり。と説明したれば、さらばとて原案のまゝに決議せり。

耕地整理は縣下諸村に先んじて着手し、昨年既に之を完成せり。之によりて用水路の改修行はれ、灌漑排水其のよろしきを得て、水田は乾田となり、二毛作をなし得る良田五十六町歩を得るに至れり。又肥料の利目も著しく、作物の發育も目立ちてよくなりて、村人の喜一方ならず。里道の改修も全く成り、村内の重なる道路は荷車人力車を通ずるに至れり。青年の氣風を養ひ、智徳を

みがくを目的とせる青年會あり、其の一事業として杉檜等の植林を營み、其の利益を以て學校の基本金とし、其の一部をさきて、一村共同の有益なる費用にあつることとせり。十四五年の後には村民は教育の爲、一厘の支出を要せざるに至るべし。

萬事此の有様なれば、一村は一家の如く和合して、二十年來未だ一人の犯罪者をも出したる例なし。

第二十八課 同胞すべて六千萬

(一)

北は樺太千島より、

南臺灣澎湖島、

朝鮮八道おしなべて、我が大君の食す國と、

朝日の御旗ひるがへせ 同胞すべて六千萬。

(二)

神代はるけき昔より 君臣分は定まりて、

萬世一系動きなき 我が皇室の大みいつ。

あまねき光仰ぎ見る 同胞すべて六千萬。

(三)

武勇のほまれ細戈 千足の國の名に負ひて、

禮儀は早く唐人も 稱へし其の名君子國。

祖先の遺風つきくゝて、 同胞すべて六千萬。

系 々 遺

(四)

瑞穂の國と農業は 開けぬ地なし、野も山も。

商工業の發達に 皇國の富を起さんと、

勤勉努力多ゆみなき 同胞すべて六千萬。

(五)

智は東西の長を採り、 文明古今の粹を抜く。

建國以來三千年 歴史の跡にかんがみて、

日進月歩ゆるみなき 同胞すべて六千萬。

(六)

東洋平和の天職は かゝる我等の肩の上。

努 採 歴史

戕

詔

東方文明先進の
任勞は重き日本國。
上下心戕一にして、
同胞すべて六千萬。

(七)

修身の徳是なりと、
教育勅語のり給ひ、
戦後經營かくこそと、
戊申ぼしんの詔書かしこしや。
大みことのりたふとびて、同胞すべて六千萬。

尋常小學讀本卷十一終

大正三年九月五日修正印刷
大正三年九月八日修正發行
大正三年九月十日翻刻印刷
大正三年十月十五日翻刻發行

著作權所有

著作兼
發行者

文 部 省

尋常小學讀本卷十一

定價 金九錢
大正八年度
臨時定價 金拾參錢

大正三年九月十五日
文部省檢査濟

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
株式會社 國定教科書共同販賣所

印刷所

大阪書籍株式會社

翻刻發行
兼印刷者

大阪市南區難波芦原町千百八十八番地九
大阪書籍株式會社
代表者 三木佐助

広島大学図書

2000018174

